ワルキューレ

MOVIE 3.20～(Fri)

©2008METRO-GOLDWYN-MAYER STUDIOS INC.ALL RIGHTS RESERVED

都で例えるなら大政奉還か？ それほどの革命が赤裸々に。

ナチス、ヒトラーと聞けば、独裁のイメージが強い。しかし、その実、徳川政権に反旗を翻した薩摩や長州をはじめとする諸藩の如く、総統（と、その親衛隊）の暴挙ともいえる政策に疑問と危機感を抱くドイツ人がいた。西郷や小松が日本で有名なように、ドイツでいまなお愛されている実在の人物。それが、トム・クルーズ演じるシュタウフェンベルク大佐だ。

愛国者であった彼は、ユダヤ人虐殺などを断行するヒトラーに反感を募らせ、打倒ヒトラー！のレジスタンスに名を連ねる。「ワルキューレ作戦」の実行者となり、ホテルオークラの桂小五郎像と同じように、街には彼の名を冠した通りや銅像が現存している。

非の打ち所のない英雄ではなく、あくまでも人間くさい史実上の人物に扮したトムをはじめとする役者たちによって、歴史は不意に身近になる。（山田涼子）

■「ワルキューレ」
■ 3.20（Fri）～
■ TOHOシネマズ二条、MOVIX京都、他
■ 監督／ブライアン・シンガー
出演／トム・クルーズ、ケネス・ブラナー、ビル・ナイ、テレンス・スタンプ、トム・ウィルキンソン、他
■ http://www.valkyrie-movie.net/

PLASTIC CITY　プラスティック・シティ

MOVIE 3.28～(Sat)

絡め捕られるほどの色気に、世情のすべてを失念する。

先月号の「悲夢」に続き、またもやオダギリ ジョー主演作。どんだけ好きやねん、という声を尻目に、近頃の彼の走りっぷりを賞賛したい。前作は韓国とのコラボで、今回は南米・ブラジル。日系ブラジル人を演じる彼は、ポルトガル語や中国語も流暢に話してみせる。さらには、全身にタトゥー。

もはや、京都（日本）との因縁を探し出して蘊蓄を語る術さえも忘れ、ただただ見惚れる。冒頭とラストのジャングルシーンなど、もう食い入るように見入るしかない。瞬きも3割減で。そんな彼が突きつけてくる、ブラジル日本人移民のリアル。

目が回るほどの「リアル」が、逆にこの物語を寓話的にさえ感じさせる。現在の「ジャポネース・ガランチード」（＝保証付の日本人）たる評価に至る陰に何があったのか、このクライム・ムービーが教えてくれる。（山田涼子）

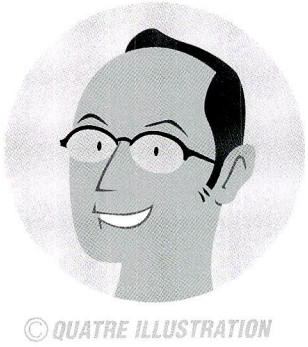
■「プラスティック・シティ」
■ 3.28（Sat）～京都みなみ会館 ※3.21（Sat）～梅田ガーデンシネマ
■ 京都みなみ会館、他
■ 監督／ユー・リクウァイ
出演／オダギリ ジョー、アンソニー・ウォン、ホァン・イー、チェン・チャオロン、タイナ・ミュレール、他
■ http://www.plasticcity.jp/

Kyoto Car-Moratorium
～京都人のクルマ知らず～

21th Lap

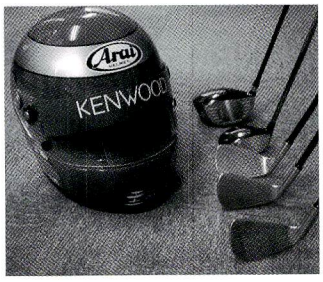
中島 崇（なかしま・たかし）

'68年生。自称「クルマのソムリエ」。創業昭和38年、北区は紫野の自動車屋（株）中島商会の二代目社長にして「安くていい車」を探すスペシャリスト。かつて自動車オークションの取引で2000万円をドブに捨て、大失敗の連続から学んだノウハウをまとめた無料小冊子「その車に手を出すな！」も好評。中島流「車道家元」を目指す京都人。



© QUATRE ILLUSTRATION

不況脱出の「ショートカット」はどこ？



友人にプロゴルファーがいるのだが、先日、彼のクラブを試打させてもらった。癖がなく素直な弾道と打ちやすさに驚いた。20年前、鈴鹿サーキットでレースをしていた頃、チャンピオンカーをドライビングする機会に恵まれた時も同じ感想だった。「プロ用のじゃじゃ馬クルマなんだろう」と思いきや、「こんなに乗りやすいの!? 初心者でも乗れそう」なのである。思ったところで曲がれて、止まれるのだ。当たり前のことを当たり前にできるから極限に挑戦できる。プロゴルファーも同じ事を言う。

受講したレーシングスクールの講師が、日本人初レギュラーF1パイロット・中嶋悟さんだったことがある。「畳にうつ伏せになって手足を大の字に広げ、右手を右前輪、左手を左前輪、右足を右後輪、左足を左後輪だと思いなさい」。教えられたことはそれだけだった。それ以来、「クラッシュ＝自分の手足が吹っ飛ぶ」という意識になり、クルマを潰さなくなった。同時に手足のように操れるナチュラルなセッティングに仕上げていくことに専念した。以後のレースでは、全身でわずかな挙動の変化を感じることができ、格段にタイムアップできた。

プロは意外と難しいことをやっている振りをしながら、当たり前のことを当たり前にしているだけなのだろう（それがなかなか出来ないのだが…）と改めて思う。

マスコミは「100年に1度の不況」と騒ぎ、「2月は逃げる、3月は去る」と言われるが、「当たり前のことナチュラルにすればよい」と、レーサー時代を思い出しながら不況脱出へのショートカットを探す年度末である。